

「俗物論」讀書メモ

平成二十二年四月二十五日

各段落の要点

段落一

・はしかき

・「俗物論」を展開するに際し、まづ記しておきたいこと

・戦争中に俗物の生態の類別表を作成したが、戦後に

出版されたラセル・ラインズ著の「俗物」は、類別および結論が、

恒存のものと酷似してゐて驚きいふ。

・學生時代に讀んだ、ジョンス・ガイリ著の「マルセル・ポルストの社會的

態度」で、ポルストが執拗に俗物を描き、まん彼自身いかに

俗物であつたかを知つた。その影響があつたかもしれない。

・自分に精神分析療法をほどこすつもりで書くので、友人知己の

段落二

・俗物の類型

・地域俗物

・中央型・都會型・主婦型
・地方型・団舎型・藝者型

・廢役

・お山の大将(重宝俗物)

・大學教授

・文化人 (知的俗物)

段落三

・俗物根性の種々相

先生型 床の間型 下座型 ボス型 取巻型

合理主義俗物 首尾一貫俗物 アルコール俗物 性的俗物
肉體的俗物 精神的俗物 知的俗物 道德的俗物 年輩俗物

↓ 日本を世界の片田舎と見るし
自分も、廢役・お山の大将となる
→ 國際文化型俗物 & 愛國俗物

職業的俗物

文化型士・実業力型士・頑迷型士

← 中間型が發生

知的俗物・情報俗物・理解型・寛容型

情報俗物

交際俗物・ゴシップ俗物・孤高俗物・孤独俗物

・機械俗物

器用俗物・不器用俗物

・一流俗物・個性俗物・多数者俗物・少数者俗物

・反俗的俗物

あらゆる俗物の執着から脱しようと腐心する俗物
俗物ノイロにせにして、かつ大罪人

段落四

俗物の定義

274下

・身分の低いもの・趣味の俗悪なる不風流者・無學のもの

・自分より上位の階級の人、自分より富有の人を、露骨に蔑み宗

したり、模倣したり、つき合はうとしたかったりする人種・社会的な地位のある人と思はれたがる人種・

俗物根性

・世間に對する自己の關係に不安を感じ、その不安を解消するため、劣弱な自己を拡大修飾して、現實の自己以上の見せかけをつくらうとする心理

趣味俗物

・趣味には客観性がなく、価値は主観性を持つてゐるため、趣味を持つてゐる人間が、持たねばならぬと固い癖に、通人や傳統の教へに随はうとする、へお墨つきと得ようとするし

自我擴大慾

・人間は誰しも、自我擴大慾に駆られてゐる

・俗物根性か他人の目を意識することから出てゐる以上、それはあくまで社会的な、あまりに社会的な情念である。

←
現代において、我々は、どうも轉んでも俗物たることをまぬかれえない。

・かつて、既成秩序の確立してゐた時代は、俗物は一種類しかゐつた。既成秩序と自分との関係において、實際以上に見せかけるものゝけが俗物だった。

段落五 245行

・自由平等思想と俗物の氾濫

・自分の最も正当化され得ぬ時に自己正当化の衝動は極點に達する。

・自我擴大欲が平等の看板にぶつかつて、すなほに許されぬ時にこそ、その欲望は熾烈化する。

・平等思想が俗物根性を嘲笑するやうなつて、せに俗物が氾濫しはじめた。

←
「平等思想は、もろに社会的優位であるかを、あまいにしてみましたか。」

・俗物的俗物こそが、現代最も高貴の美德？

・既成秩序にせよ、なんにせよ、自分の劣弱性をよく知つてゐて、すなほにそれの寄りかかつてゐる。
自分かゝるべき處にゐるといふ境地にある。

・自我擴大欲にせよ、俗物根性にせよ、人間の本性であり、永遠に消えうせぬものである以上、へたに抑圧せぬ方がよい。

國語辭典で「俗物」を引くと、「自分の利益や評判しか考へない様子を云ふ人物」と説明してある。恒存の俗物の定義は、社會的存在たる人間の、情念の分析にまで及んでゐて、多種の様を俗物が登場するまで、讀んでみて、思はず苦笑させられる文章である。

我が國においては、近代化の過程で、自由・平等思想の、否定因としての絶対者抜き、肯定的のみを受け入れられてしまったため、社會的存在たる我々は、すべてが俗物の範疇に入れられてしまふ、はめになった。

すべてが俗物といふとは、つまりは、相對主義の泥沼にはまってしまう。我々は、今や、古典的俗物、すなはち「俗物的俗物」にあかるといふ、さげすみ状況にある。

恒存の言ふ通り、我々は、自我擴大欲や俗物根性も永遠に捨て去り得ぬ以上は、へたに抑圧せぬが良いた。

そのためには、それらの情念を解放する、精神の政治學が必要なるだろう。集團的自我の領域においては、

権力や權威の關係に身を置き、適度に支配・被支配の情念を解放すること、目指すべきものだろう。

ところで、この「俗物論」が書かれたのは、昭和三十一年で、この頃はまだ、俗物(廢物)对本物といふ図式は成立してゐて、俗物と言はれたくないといふプライドも存した、とだろう。ところが、

昭和四十九年の「濁断的」餘りに濁断的になること、

「上下だの一流、底層だのといふ相違をおよそ問題にせず、意識もしない、けさ方もあり、今日の青少年の大方は、これに属する。(……)彼等には、本物だの廢物だのといふ意識が既に無いからである」といふ状況になったと、恒存は見えてゐる。(全6、512P) ここで、今日の青少年の大方とは、私も

その一人かと、やれとまどふものがあるが、これでは「俗物論」も文要とされない。さういふ三十数年後の今日、我々はますます、身動もできない状況に追い込まれ、「自分かゝるべき、と處にゐる」といふ、サボる着る、かゝるも遠ざかる一方ではあるが、